

I 研究の概要

《研究主題》

小学校教育につながる幼稚園教育のあり方について

～学びの芽を育てる教育活動を求めて～

1 主題設定の理由

幼児を取り巻く保育環境の変化から

- 幼児を取り巻く保育環境は、少子化・情報化・価値観や生活様式の多様化に伴い、刻々と変化している。教育再生会議の最終報告で幼児教育の義務教育化が示される一方で、保育所の待機児童数は2万人に迫るⁱ。幼保一元化施設としての認定こども園において、省庁や各担当課の連携が期待される一方で、法の規制緩和をもってしてもあずかってもらえない幼児のための認可外保育施設が増加している。規制緩和の影響からか、民間企業の保育業界への参入も、珍しいことではなくなってきている。就学前の幼児を保育する施設がこれ程多様化する中で、小学校との連携や小学校での教育を見据え、生涯にわたる人格形成の基礎を培う保育をどれだけ実践しているのか、問われているところである。
- 平成17年1月の中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」や、それを受けて計画された「幼児教育振興アクションプログラム」（平成18年10月）では、“発達や学びの連続性を踏まえた”幼児教育の充実が示され、小学校教育との連携・接続の強化が重要視されている。また、平成18年に教育基本法が改正され、それに伴って学校教育法も改正された。その中では、「幼稚園」の項目が「小学校」の項目の前に置かれ、連続性を意識させるようになった。さらに、これらの答申や改正を受けて幼稚園教育要領も平成20年に改訂され、幼稚園における教育の基本を大切にしつつ小学校との連携を行っていく役割は益々大きくなっていくところである。
- これだけ幼小連携の重要性が謳われる中で、幼稚園で日々行っている教育が、小学校教育につながる興味関心・意欲・知的好奇心・協調性などの芽としてどれだけ具体性があるのかは明確ではない。それらを明らかにしながら日々の保育を振り返り、充実させていくためにも、本主題における研究を進めていくことは意義があると考えられる。

本園の実態から

- 園児の約半数が本園に隣接する小学校に進学しているので、休み時間になると卒園児を中心に小学生が遊びに來たり、プールや遊具などを使用させてもらったりしているが、計画的な交流行事や定期的な情報交換による教師同士の相互理解が、それ程多くないという現状がある。
- 本園を卒園した子ども達の小学校での様子を聞くと、小学校教諭や保護者から、「話の聞き方がよい」、「長時間席についていられる」など概ね好印象であるが、そのような姿が本園の教育課程・指導計画とどこでつながっているのか、教師自身も把握できていない。
- 隣接する小学校の様子はすぐに見に行くことができるが、市内の他の小学校に通う卒園児の様子

は、なかなか知る機会がない。

本園の教育目標から

小学校教育につながる幼児教育のあり方を求めていくことは、本園の教育目標である「心身ともに健やかで、自主性・協調性のある心豊かな幼児を育てる」を目指すことになると思う。

また、次に示す本園教育のめざす幼児像の具体化にもつながると考える。

＜本園のめざす幼児像＞

- ・健康で明るく、たくましい子ども
- ・自分のことは自分でやり、がんばることができる子ども
- ・人の話を聞き、のびのびと自己表現できる子ども
- ・友達と仲良くし、思いやりのある子ども

2 主題に対する考え方

(1)「小学校教育につながる幼稚園教育のあり方」とは

幼稚園教育と小学校教育は発達や学びの連続性があるものの、遊びや生活を中心とした幼稚園教育と、教科等の学習を中心とした小学校教育とでは教育の内容や方法が異なる。それら異なるものを滑らかに接続する、という意味で「つながる」という言葉を用いた。ただし、「滑らか」というのは障害を取り払って段差をなくしてしまう、という意味ではない。小学校に入学する幼児たちが、少しがんばれば乗り越えられる、という程度の段差を残しつつも、例えば幼稚園と小学校の教職員が相互理解・相互交流などを深めることによって、その乗り越えがスムーズに行われるようにする、という意味での「滑らか」であるⁱⁱ。

その後の教育に幼稚園教育が有意義な経験となるためには、幼稚園教育での遊びや生活での経験の中で、何がどのように小学校教育につながり、また、自然につながっているのかを考える必要がある。それは、小学校での勉強に備えて学習準備教育や各教科の内容や技能と保育との対応関係を明確にし、欠けている内容を保育に補ってつなげていこうと考えるものではない。遊びの中で育ててきたもの、育てたいものを明らかにし、さらに充実し、実践・反省を繰り返していくことで、小学校につながる学びや育ちを確かなものにしていくと考えることである。

(2)「学びの芽を育てる教育活動」とは

幼稚園での教育活動としての遊びや生活の中で培われる資質や能力は多い。本園では、それらのうち小学校以降へつながる力として、①「きょうどう」、②「かがく」、③「ことば」、の3つを挙げ、それらの力を「学びの芽」として捉え、培いたい資質や能力を探る視点として、幼稚園教育のあり方を研究した。特に、①・②は小学校教育における「生きる力」の育成ⁱⁱⁱ、③は言葉によるコミュニケーション力の充実^{iv}につながっていくと考えたからである。

また、隣接する神興小学校では、「『できた・わかった』喜びを味わう算数科学習指導」という主題に、「考えを伝え合える交流場面の工夫を通して」という副主題を据えて研究に取り組んでおり、「自分の考えと友達の考えを交流し合う中で、課題を解決していく子」を目指す子どもの姿の一つとして挙げている。そこでこのつながりを考えると、この3つの視点の中でも特に①・③は、小学校教育とのさらに密接なつながりが期待できる部分である。

さらに本園では、以下に示すような3つの「学びの芽」それぞれにおける年少・年長児の「目指す幼児の姿」を年間の指導計画に反映させ、日々の教育活動に結び付くようにした。

①「きょうどう」

「きょうどう」とは、「他者と協同し合って新たなものを創り出していく力」のことである。

幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである。その人格形成の基礎の第一として、社会性の芽生えを大切にしたい。また幼稚園教育では、集団の一員としての協同的な遊びや生活の中で、役割を分担したり助け合ったりして、喜んで集団に参加する態度を養うという目標がある。

具体的には、クラス全体に相互に分担し、助け合って何かを創り出していく遊びや、作った物や出来事の中で、遊びの展開とともに新たなルールを加えたり考えたりして、さらに変形しながら工夫し楽しんでいく力のことである。同時に、そのような活動の中で幼児は、思いやりの心、我慢する心、相手の話を聞く力なども学んでいる。

<目指す幼児の姿>

- ・年少では・・・気の合った友達と共通のイメージや目的をもち、遊びを進めていく幼児。
- ・年長では・・・友達のよさを認め合い、協力して活動を進め、さらに発展させていく幼児。

②「かがく」

「かがく」とは、「体験や経験を通して科学的思考の基盤となる力」のことである。

遊びや生活の中での様々な体験や経験が、小学校以降での各教科の学習の基盤や意欲につながる。ここで言う「科学」とは、体系的であり、経験的に実証可能な知識^{vi}のことであり、自然科学や社会科学、人文科学など多岐に渡る。園ならではの多様な環境や教育課程によって保障されているものである。

本園ではさらに、「基盤となる力」を「②-1 不思議・疑問」、「②-2 憧れ」、「②-3 比較・予想」、「②-4 気付き・驚き」、「②-5 喜び・楽しさ」として捉え、体験や経験を通してどのような力が培われるのかを整理した。これらは単独に培われるものではなく、相互に関連し合い、さらに次の体験や経験に結びついていくものである。

「②-1 不思議・疑問」を、様々な事象に対して感じることで、それを解明したいという欲求が現れてくるだろう。その結果、このことが幼児の更なる活動を引き出す強いきっかけとなりうると考えられる。

「②-2 憧れ」は、教師や友達などモデルとなる対象に抱くことで、模倣・質問・思考・試行などの活動のきっかけとなる。身近にそのような対象があるということは、幼児の意欲を更に高めることになると考えられる。

「②-3 比較・予想」は、それまでの体験や経験（過去）と比べて見通したり、同様の現象や同じ活動をしている友達や教師（現在）と比べて類推したりすることである。過去や現在と比較することで予想（未来）はより確かなものとなり、その通りになれば喜び（②-5）を感じ、次の活動への意欲となる。その通りにならなくても、「なぜそのようなにならないのだろう？」と疑問（②-1）に思うことで、やはり次の活動へのきっかけとなる。

「②-4 気づき・驚き」は、主に体験を通して新たに発見したり思いがけないことに感動したりすることである。これらのことが刺激となり、次の体験への意欲や積極性につながると考えられる。また、例えば「育てていたダンゴムシが死んでしまって悲しい」という失敗・残念・後悔などのマイナスの経験から「気づき」、そこから「死なせないためにはどうすればよいか」という「気づき」が生じることもこの項目では忘れてはいけない。

「②-5 喜び・楽しさ」は、同じような体験をするときに強い意欲となる。例えば、「図鑑で花の名前を調べてそれが判明した」という体験に「喜び・楽しさ」を感じたならば、次に分からない事柄があった場合、率先して図鑑で調べるという姿が見られるだろう。同様に、「発見（②-4）を楽しむ」、「運動を楽しむ」、「成功を喜ぶ」、「予想（②-3）した通りになって喜ぶ」、「教えることを喜ぶ」など、様々な場面で経験されることで、それが更に次の活動につながると考えられる。

<目指す幼児の姿>

- ・年少では・・・身近な環境に興味や関心をもち、いろいろな発見を喜ぶ幼児。
- ・年長では・・・身近な事象への興味や関心を高め、考えたり試したりする幼児。

③「ことば」

「ことば」とは、「集団の中で、言葉を使って自己を発揮していく力」のことである。

言葉は、自己を表現したり他者を理解したりする人間特有の手段である。特に幼児期は、身体表現が言葉による表現へと大きく変化し、それに伴って脳も著しく発達する重要な時期である。

集団での遊びや生活の中で葛藤や交渉などを繰り返し、互いに分かり合い共感したり、考えを出し合い一つの目的に取り組んだりする経験を十分にしていくことで、言葉による自己の表現や調整、「自分の思いを伝えよう」、「相手の思いを知ろう」とする気持ちを培うことは、小学校以降のコミュニケーション力の基盤につながる重要な教育内容であると言える^{vii}。

<目指す幼児の姿>

- ・年少では・・・教師や友達の話聞き、自分の思いや考えを言葉で伝える幼児。
- ・年長では・・・友達と心を動かす体験を積み重ね、それを言葉を使って伝え合う幼児。

3 研究の目標と仮説

<研究の目標>

幼児の学びの芽を育てる教育活動を実践・研究し、小学校教育につながる幼稚園教育のあり方を明らかにする。

<研究の仮説>

幼稚園教育の中で育ててきたもの、育てたいものを明確にし、さらに充実しておくことで学校においても必要と思われる内容を学びの3つの視点から整理し、日々の教育活動を展開していけば、小学校教育につながる幼稚園教育のあり方が明らかになるであろう。

4 研究の内容

(1) 本園指導計画と幼稚園教育要領・学習指導要領との照合、及び指導計画の見直し

幼稚園で日々の教育活動を行っていくにあたって、最も基本的かつ具体的な指針が指導計画^{viii}だろう。仮説より、幼稚園教育の中で育ててきたもの、育てたいものを「明確」にし、さらに「充実」し、3つの視点から「整理」するためには、この指導計画を捉え直す必要がある。

○ 幼稚園教育要領・小学校学習指導要領との照合

そもそも指導計画は、文部科学省告示の「幼稚園教育要領」をもとに各園で作成されているものであるが、改めて本園の指導計画を幼稚園教育要領と照らし合わせ、さらに「小学校学習指導要領」（文部科学省告示）と照らすことで、幼稚園教育から小学校教育へのつながりを考えることにした。

ここでは、指導計画それぞれの期の「ねらい」と幼稚園教育要領における5つの領域の「ねらい」、または、小学校学習指導要領における各教科・道徳・特別活動の主に第1学年及び第2学年の「目標」を照らし、本園の期の「ねらい」は幼稚園教育要領のどこを参照しているのか、或いは、小学校でどのような姿につながっていくのかを探った^{ix}。次の表は、その結果を数で示したものである。

<幼稚園教育要領と照合>

健康	人間関係	環境	言葉	表現
8	19	9	6	4

<小学校学習指導要領と照合>

国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画 工作	家庭	体育	道徳	特別 活動
6	0	1	0	12	3	6	0	9	21	5

数の上で見ると、「人間関係」、「道徳」の割合が特に大きい。幼稚園という初めての集団生活の中で、本園では領域「人間関係」のねらいを教育活動に多く取り入れ、人とかかわりから育つものを重要視し、そしてそのことの多くが小学校での道徳教育の基盤となっているということが分かる。特に年少では、道徳の（内容②）「主として他の人とかかわりに関すること」へのつながりが多く、年長では（内容④）「主として集団や社会とかかわりに関すること」へつながるところが多かった。

数以外の観点からも判明したことがいくつかあった。一つは、指導計画の「ねらい」を教育要領の「ねらい」、学習指導要領の「目標」と照合するだけでは、補足を必要とする部分が多く、指導計画の「内容」も各要領の「内容」と照合する必要がある、ということである。また、本園の指導計画そのものについて、抽象的過ぎて各要領との照合が困難な場合も多く、期のねらいをもっと具体的にし、その時期の幼児の姿に沿ったものにする、こと、「ねらい」とそれに対応する「内容」、「環境構成」、「教師の援助」をもっと明確にすること、が改善点として挙げられた。

○ 本園指導計画の見直し

通常は、学期末ごとに見直しをしている指導計画であるが、照合の結果、見直しが必要であることが判明したため、以下のような改善を行った。

(問題点)	(改善)
①「ねらい」とそれに対応する「内容」、「環境構成」、「教師の援助」が明確でない。	①表の形式を変え、各項目を横に並べた。(改訂2版)
②各期の指導計画が抽象的過ぎる。	②それぞれの時期の幼児の姿を見直し、「ねらい」、「内容」を見直し、それに伴って「環境構成」、「教師の援助」もより効果的で分かりやすい記述にした。(改訂3版)
③本園指導計画がどのように小学校につながっているのか、教師自身も把握できていない。	③3つの「学びの芽」の視点から「ねらい」を捉え、活動・行事等の面で小学校と連携している内容を書き入れた。(改訂4版)

○ 幼稚園教育要領・小学校学習指導要領との照合

幼稚園教育要領・小学校学習指導要領共に平成20年に改訂され、本園指導計画も見直しを行ったことから、もう一度照合を行う必要を感じた。今回は、「ねらい」だけでなく、「内容」においても照合を行った。また、「外国語活動」や「総合的な学習の時間」の「目標」や「内容」も視野に入れながら照合を行った。その結果は、別添えの資料に載せた。次表は数における結果である。

<幼稚園教育要領との照合>

～ねらいの照合～

健康	人間関係	環境	言葉	表現
8	20	9	3	4

～内容の照合～

健康	人間関係	環境	言葉	表現
19	43	37	8	14

<小学校学習指導要領との照合>

～ねらいの照合～

国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	道徳	外国語	総合	特別活動
2	0	0	0	17	2	3	0	4	6	0	0	10

～内容の照合～

国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	道徳	外国語	総合	特別活動
44	0	5	0	31	11	21	1	46	34	1	0	16

※「外国語」→「外国語活動」、「総合」→「総合的な学習の時間」とする。

まずは「ねらい」の照合を見ていく。ここではやはり、「人間関係」、の割合が多い。「道徳」の数が前回に比べて減ったのは、「内容」の照合も同時に行ったことで、「内容に含まれるのであれば、ねらいに無理して含めることはない」という作用*が、共通理解としてはたらいたからであろう。

「内容」における照合では、「健康」、「環境」、「国語」、「図画工作」、「体育」、「道徳」の分野が、「ねらい」では照合数が少ないことに対して、圧倒的に多い。これは、これらの多様な分野による活動を行う

ことでねらいを達成しようとしていると考えれば至極当然のことであり、本園で積極的に取り組んでいる活動を端的に示しているとも言える。「人間関係」、「生活」、「特別活動」の分野は、「ねらい」でも、「内容」でも照合数が多い分野であり、小学校教育に密接に結び付いていると言えるだろう。

表には示していないが、「内容」の「国語」44項目中34項目が、「特別活動」16項目中12項目が年長の時期で照合された。他の分野が年少・年長で大差ないことを考えると、これらの分野が、特に年長での活動を通して培われていく分野であると判断できる。

幼稚園教育要領・小学校学習指導要領の改訂により、より具体的に照合を行うことができた。幼稚園教育要領では、「健康」、「人間関係」の「内容」に新設項目^{xi}があり、このことが、本園の食に関する指導や、集団を通しての「協同的な学び^{xii}」への指導の根拠となった。小学校学習指導要領では幼稚園以上に大幅な改訂が行われ、中でも「国語」、「生活」、「体育」、「特別活動」では、目標や内容が新設されたり具体的になったりしたことで、本園指導計画と関連付けやすかった。学習指導要領の段階から幼稚園教育とのつながりを意識している、と捉えることもできるだろう。

(2) 指導計画に基づく教育活動の実践

指導計画の見直しに伴い、それを反映した保育を実践した。反映の方法として、保育指導案に「学びの芽」の3つの視点を取り入れ、普段行っている保育がどのように「学びの芽」に結び付いていくのかを探った。具体的には、幼児の姿を3つの視点から整理し、期のねらい(=指導計画→こちらも「学びの芽」の視点から「ねらい」を捉えている)をもとにしながら日案を立て、日案の「ねらい」や「内容」も「学びの芽」の視点から捉え、それに従って教師の援助や環境構成を行った。例えば、

<ねらい>

- 友達と一緒に鉄棒、マット、平均台などの運動遊びに取り組み、できたことを喜ぶ。(視点②・③)

<内容>

- ・ 正しい体の動かし方を知り、自分なりの目標をもって運動遊びをする。(視点②)
- ・ 正しいやり方や技のステップを友達に教えながら鉄棒遊びをする。(視点③)

<教師の援助>

- ・ 安全に配慮し、動物に例えるなどしながら正しい体の動きを伝えていく。(視点②)
- ・ 正しい動きのできている幼児を「先生」として、教える機会を設ける。(視点③)

<環境構成>

- ・ 鉄棒の技のステップを表にして貼り出しておく。(視点②・③)

といった指導案である。そのような実践から、「学びの芽」が育っていると読み取れる幼児の姿を抽出していった。詳しくは、「Ⅱ エピソード・実践事例」に掲載した。

小学校教育につながる幼稚園教育のあり方

〈目指す幼児の姿〉

～「きょうどう」～

年少：気の合った友達と共通のイメージや目的をもち、遊びを進めていく幼児。

年長：友達よさを認め合い、協力して活動を進め、さらに発展させていく幼児。

～「かがく」～

年少：身近な環境に興味や関心をもち、いろいろな発見をする幼児。

年長：身近な事象への興味や関心を高め、考えたり試したりする幼児。

～「ことば」～

年少：教師や友達の話の聞き、自分の思いや考えを言葉で伝える幼児。

年長：友達と心を動かす体験を積み重ね、それを言葉を使って伝え合う幼児。

教育課程・指導計画の見直し

- 指導計画の中で、幼稚園教育の中で育ててきたもの、育てたいものを明確にし、充実させ、3つの視点から整理する。
- 指導計画と幼稚園教育要領・小学校学習指導要領を照合する。
- 教育課程を小学校と幼稚園で比較し、行事や活動のつながりを比較する。

教育活動の展開

- 指導計画に基づく、日々の教育活動の展開。
 - ・3つの視点をもとに保育実践を行う。
 - 「ねらい」や「内容」を視点から捉え、効果的な教師の援助や環境構成を行う。
- 小学校との連携
 - ・園児と児童の活動や行事での交流。
 - ・職員相互の連携
- 卒園児の「学びの芽」の育ちについて、追跡調査を行う。

「学びの芽」を育てる
教育活動の実践

3つの「学びの芽」

- ・「きょうどう」(視点①)：他者と協同し合って新たなものを創り出していく力
- ・「かがく」(視点②)：体験や経験を通して科学的思考の基盤となる力
- ・「ことば」(視点③)：集団の中で、言葉を使って自己を発揮していく力

本園の実態

- 小学校との計画的な交流行事や定期的な情報交換による教師同士の相互理解がそれほど多くない。
- 卒園児の姿が、教育課程・指導計画とどこでつながっているのか明確でない。
- 市内の他の小学校に通う卒園児の様子を知る機会が少ない。

6 研究の経過と今後の見通し

平成 19 年度	2 学期	研究主題決定・理論研修 指導計画と幼稚園教育要領・小学校学習指導要領との照合（第 1 回）
	3 学期	指導計画の見直し（改訂 2 版～3 版） 第 1 回公開保育 第 2 回公開保育
平成 20 年度	1 学期	指導計画の見直し（改訂 4 版） 指導計画と幼稚園教育要領・小学校学習指導要領との照合（第 2 回） 第 3 回公開保育 第 4 回公開保育 エピソード・事例のまとめ
	2 学期	福岡県国公立幼稚園研究発表会
	3 学期	幼稚園教育課程と小学校教育課程の比較
平成 21 年度		卒園児の「学びの芽」の育ちについて

註

- i 「厚生労働省：保育所の状況（平成 20 年 4 月 1 日）等について」によれば、1 万 9 千 550 人。
- ii この「滑らかな接続」、「適度な段差」については、秋田喜代美「接続期の遊びと学び」（『幼稚園じほう』2006. 1）、お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校・子ども発達教育研究センター『「接続期」をつくる』を参考にした。
- iii 中央教育審議会答申（1996. 7）で示された「生きる力」では、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」、「たくましく生きるための健康や体力」が重要であるとされている。3 つの「学びの芽」のうち、①は上記 2 つ目の他人と協調していく人間性に、②は上記 1 つ目や 3 つ目の主体的に判断、行動していく意欲や資質、能力につながっていくと考えられる。
- iv 児童の言語活動については、平成 20 年に改訂された小学校学習指導要領でもその充実が取り上げられている。
- v cf. 学校教育法第 23 条
- vi 『広辞苑』より抜粋。
- vii ここでは、和田万希子「5 歳児における言葉によるコミュニケーションを考える」（『幼稚園じほう』2007. 11）を参考にした。
- viii 指導計画とは、「保育を実施するにあたって必要な指導計画」（cf. 『保育用語辞典』）であるので、年間指導計画、期間計画、月案、週案、日案などもこれに含まれるが、ここでは、幼稚園で一般的に教育課程と共に作成されている年間指導計画を指す。
- ix ただし、「道徳」における目標は、6 学年を見通した目標であるため、各学年それぞれの「内容」（特に第 1 学年及び第 2 学年）をもとに、つながりを探った。
- x ix にも書いているように、「道徳」の目標は非常に大まかなものであるため、より具体的な照合を目指して、「内容」での一致を図った。
- xi 健康－内容⑤「先生や友達と食べることを楽しむ」、人間関係－内容④「いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ」、人間関係－内容⑧「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。」が新設された。
- xii 「協同的な学び」とは、「小学校入学前の主に 5 歳児を対象として、幼児同士が、教師の援助の下で、共通の目的・挑戦的な課題など、一つの目標を作り出し、協力工夫して解決していく活動」と位置付けられている。（cf. 「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」）